

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12784

研究課題名(和文) 中印文明の邂逅は何をもたらすか 「ゾミア」の社会経済変容を中心とする予備的研究

研究課題名(英文) Preliminary Research on Socio-Economic Transformations of "Zomia" under the Increasing Influences of China and India

研究代表者

藤田 幸一 (FUJITA, KOICHI)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・教授

研究者番号：80272441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：大きく2つの成果が上がった。第1に、京都大学東南アジア地域研究研究所に「ゾミア研究会」を立ち上げ、2年の研究期間内に内外の研究者を招へいして計24回の研究会を開催し、研究ネットワークの構築を行った。「ゾミア研究会」は東南アジア学会の学会員などに広く知れ渡り、また海外にもよく知られる存在となり、今もなお他財源を利用して継続している。第2にまだ予備的段階にとどまっているが、中国、ミャンマー、インドの3つの異なる国家領域に分かれて住むカチン族の社会経済的現況、その形成に至った歴史的背景、今後の発展の展望等を、現地実態調査に基づき明らかにした。

研究成果の概要(英文)：There are largely two achievements. One is to organize "Zomia seminar" series in CSEAS, Kyoto University and 24 seminars were held during the two-year period. The seminar is now widely known among the related academicians in Japan and abroad. Two is to conduct fieldwork for Kachin people in the three countries of China, Myanmar and India in order to investigate the differences and similarities of their current socio-economic status, its historical background and future prospects, although the fieldwork-based research remained still preliminary.

研究分野：農業経済学、アジア地域研究

キーワード：ゾミア 地域間比較 カチン族 研究ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

中国雲南省付近から東南アジアを經由してインド北東部に至る、「辺境」の山岳地帯に住む少数民族(ゾミア)は近年、交通基盤整備やそれを基礎とした経済発展を契機に、急速な社会経済変容の渦中にある。同地域では、ミャンマーをはさみ中国とインドが対峙する構図も明瞭になりつつある。これまで、中国、東南アジア、インドの「地域研究」で別々に扱われてきたゾミアの動向を一体として扱い、そこで生じている社会経済政治等の構造および構造変化を解明することは、重要な研究課題である。

2. 研究の目的

これまで中国、東南アジア(さらにラオス、ミャンマー、ベトナムなど国家単位)、インド、バングラデシュなどで別々の「地域研究」の枠組みの中で行われてきたゾミア研究を統一的視野の下で再編成する。すなわち京都大学東南アジア地域研究研究所に「ゾミア研究会」を立ち上げ、研究ネットワークの構築を図る。

もう1つの研究目的は、別々の地域研究の中で扱われてきたゾミアを通地域的に研究する試みの端緒として、中国雲南省、ミャンマーのカチン州、インドのアルナーチャル・プラデーシュ州とアッサム州の3つの国家領域に分かれて住むカチン(ジンポー、シンポー)族の社会経済政治等の構造および構造変化を把握するため、3つの国でフィールドワークを行うことである。

3. 研究の方法

上述の通り、第1にゾミア研究会の企画・開催を行って、国内外の研究ネットワークの構築に努める。第2に、中国、ミャンマー、インドに分かれて住むカチン族の社会経済政治等の構造および構造変化を、3つの国でのフィールド調査を通じて比較・解明し、カチン族を通地域的に研究する試みの火ぶたを切る。

4. 研究成果

1) ゾミア研究会の企画・開催

別財源を組み合わせながら、ゾミア研究会を研究期間中の2年強の間に、合計24回、開催した。ゾミア研究会は、東南アジア学会の学会員など、関連の研究者の間で広く知れ渡ることとなり、また海外にもよく知られる存在となった。研究ネットワーク構築という第1の目的は十分達成されたといってもよいであろう。

以下、第1回から第24回のゾミア研究会の報告者・演題等を整理して示す(ただし、第1回および第2回は、科研の期間外)。

第1回(2015年2月24日)

久保忠行(立命館大学)「現代のゾミア? カヤー(カレンニー)世界の人の移動と民族の動態」

今村真央(京都大学)「カチンとキリスト教: プロテスタント宣教師運動の言語観と組織力」

第2回(2015年3月9日)

畢世鴻(雲南大学)「テインセイン政権発足以来の中国・ミャンマー関係」

藤田幸一(京都大学)「ミャンマー・シャン州チェウメーのシャン族農村の土地利用、生業、農村金融」

第3回(2015年6月8日)

Magnus Fiskesjö (Cornell University) “The Wa Former Headhunters of the China- Burma Frontier”

第4回(2015年6月9日)

Magnus Fiskesjö (Cornell University) “The Southern Great Wall: Drawing the Line between Raw and Cooked Barbarians”

第5回(2015年6月15日)

Nbyen Dan Hkung Awng (Humanity Institute, Myanmar) “The Kachin in Northern Myanmar: Between Democratization and Civil War”

Sanjib Baruah (Bard College, Center for Policy Research), “India and Its Northeast: Another Big Push without a Takeoff?”

第6回(2015年7月5日)

テキアライ(京都大学院生)「麻薬代替開発と農村社会経済—ミャンマー・コーカン自治区の例を中心に」

生駒美樹(東京外国語大学院生)「チャをめぐる生産者間の関係—ミャンマー、シャン州パラウン自治区ナムサン郡を事例として」

第7回(2015年9月25日)

Decha Tangseefa (Thammasat University; Visiting Scholar at CSEAS, Kyoto University) “Human, Animal, and Thing: Paradox of Security along the Thai-Burmese Borderland”

Amporn Jirattikorn (Chiang Mai University; Visiting Scholar at CSEAS, Kyoto University) “Buddhist Holy Man Khruba Bunchum and Transnational Community of Faith at the Thailand-Burma Borders”

第8回(2015年10月23日)

David A. Bello (Washington and Lee University) “Cultivating a Malarial Borderland in 18th Century Southwestern Yunnan”

西川和孝(国士舘大学)「漢族移民と技術移転—明清期の雲南南部を中心として」

第9回(2015年11月27日)

加藤久美子(名古屋大学)「シブソンパンナーとその近隣地域に対する中国およびビルマの関与: 1830年代」

第10回(2015年12月14日)

Andrew Ong (Ph.D. student, Harvard University) “Make and Break: Connection and Isolation in Wa Special Region, Myanmar”

John Buchanan (Ph.D. candidate, University of Washington) “Opium as a Conflict Crop: Myths and Realities from Burma”

第11回(2016年2月5日)

Noboru Ishikawa [石川登] (Kyoto

University) & Masao Imamura [今村真央] (Kyoto University) “Rethinking the Hill-Plain Divide in Southeast Asia: Putting Geophysical and Cultural Landscapes to Good Use”

Comments: Rohan D’Souza (Kyoto University)

Kazufumi Nagatsu [長津一史] (Toyo University), “Unsubjugated Margins: A Genealogy of a Maritime Creole and its Spatial Settings in Southeast Asian Maritime World”

Comments: Yukti Mukdawijitra (Thammasat University and Kyoto University)

第12回 (2016年3月28日)

Keita Kurabe [倉部慶太] (Tokyo University of Foreign Studies) and Masao Imamura (Kyoto University) “Ethnicity, Vernacular, and Protestantism: A study of the Kachin in Northern Myanmar”

Ho Ts’ui-p’ing (Academia Sinica) “Dancing Diplomacy: Cross-Border Recognition at Jingpo Manau Zumko Festivals”

第13回 (2016年7月16日)

太田淳 (慶應義塾大学) 「海のゾミア：南西カリマンタン海岸部の移民集団と国家」

佐久間香子 (京都大学) 「水路・陸路・空路で編む社会空間：現代のボルネオ内陸部社会における生活戦略の考察」

コメント：加藤剛 (京都大学名誉教授)

第14回 (2016年9月14日)

鈴木佑記 (東洋大学) 「モビリティ、アイデンティティ、コモディティ—水のゾミアに生きる漂流民の 踊り場 ネットワーク」

コメント：石川登 (京都大学)

第15回 (2016年9月27日)

Nasir Uddin (University of Chittagong) “Understanding State from the Margins: A Case of the Chittagong Hill Tracts”

第16回 (2016年9月30日)

武内房司 (学習院大学) 「近代雲南鉱山業の展開と雲南南部社会の変容：箇舊錫業を中心に」

宮沢千尋 (南山大学) 「ゾミア論再考 - フモン族の反乱・メシアニズムの視点から」

第17回 (2016年10月22-23日)

中田友子 (神戸市外国語大学) 「ゾミアから見るラオスの低地民と山地民の民族間関係」

Koichi Fujita [藤田幸一] (Kyoto University) “Transformations of Kachin Village: Mid-term Report of Household Survey in a Study Village near Myitkyina, Myanmar”

Kenneth MacLean (Clark University/Kyoto University) “A Threat to Peace? Humanitarian Mine Inaction in Burma/Myanmar”

Masao Imamura [今村真央] (Yamagata University) & Keita Kurabe [倉部慶太] (Tokyo University of Foreign Studies) “History of Kachin Vernacular Media: How Writing Has Spread among Jinghpaw and Others”

第18回 (2016年11月26日)

Eric Vanden Bussche (Sam Houston State University) “Mapping Borders and Negotiating Identities: State-Building in the Sino-Burmese Borderlands (1885-1960)”

Comments: Rohan D’Souza and Ken MacLean (Kyoto University)

第19回 (2016年12月8日)

Nishaant Choksi (Kyoto University), “Looking Askance: Historical Time and the Recovery of New Scripts in South and Southeast Asia”

Comments: Ken MacLean (Kyoto University)

第20回 (2016年12月23日)

謝祺 (名古屋大学院生) 「清代前半期雲南における塩専売の官運制について」

望月直人 (京都大学) 「庇護権の陰で—20世紀初め、中国・ベトナム国境地域での事件を手がかりに」

第21回 (2017年1月13-14日)

Jianxiong Ma (Hong Kong University of Science and Technology) “The Mining Industry, Caravan Transportation and Ethnic Mobilization in southwest China from the 17th to 19th Century”

Christian Daniels (Hong Kong University of Science and Technology) “Mongol-Yuan and Tai Polity-building in Northern Mainland Southeast Asia: The Chinese Pacification Commissioner of the Lan Na Polity, and the Rise of Mang Mang Maaw Maaw c. 1260 to c. 1350”

Masashi Okada [岡田雅志] (Osaka University) “Tracking Routes to Heaven: Diaspora and Re-imagined Ethnicity of Tai Dam”

Mio Horie [堀江未央] (Nagoya University) “Moving South, Moving North: The Gendered Cross-border Migration and Its Impact on Ethnicity among the Lafu in China-Myanmar Border”

Haimei Shen (Yunnan University) “Governing Cross-border Marriage: The Chinese Local Government, Ethnic Minorities and Foreign Brides in Yunnan-Myanmar Border”

第22回 (2017年2月3日)

吉川和希 (大阪大学院生) 「十八世紀のベトナム黎鄭政権と諒山地域—藩臣集団の祖先移住伝承に関する分析を中心に—」

伊藤正子 (京都大学) 「20世紀以降の中越国境 - ベトナム東北山間部ランソン省のタイ・ヌンと中国—」

樫永真佐夫 (国立民族学博物館) 「ベトナム、ターイの始祖による盆地開拓の伝承」

第23回 (2017年2月17日)

Samak Kosem (Chiang Mai University) “Muslimization and Cultural Politics of Islam Propagation among Hmong/Akha Youth in Northern Thailand”

第24回 (2017年3月19日)

木村真希子 (津田塾大学) 「国家への反乱から国境を越えた先住民族ネットワーク—ナガの独立運動と人権運動に見るゾミアの人々の現在—」

コメント：小島敬裕（津田塾大学）
高田峰夫（広島修道大学）「ロヒンギャ」
について - 歴史と現在、議論の困難 - 」

なおゾミア研究会は 2017 年度も継続して
おり、6 月に開催予定の第 27 回まで決まっ
ている。

2) カチン族の社会経済政治等の研究

2016 年度にミャンマー・カチン州で 2 回、
2017 年度にはミャンマー・カチン州で 1 回、
中国雲南省で 1 回、インド・アルナーチャル・
プラデーシュ州とアッサム州で 1 回、カチン
族の居住する農村地域等に出かけ、その社会
経済政治等の現況、その形成に至った歴史的
背景、将来展望などについて調査研究を実施
した。なお、ミャンマー・カチン州では州都
ミッチーナ周辺およびプータオ周辺農村で
フィールドワークを行い、またミッチーナ近
郊農村から 1 つの調査対象村を選定し、全世
帯を対象に調査票を用いた詳細な社会経済
調査も実施した。

また中国雲南省でのフィールドワークは、
特に現在の習近平政権になってから外国人
には厳しくなっており、詳しい調査ができな
かったことをあらかじめ断っておく。

主な成果をまとめると次のようになる。

1. 3 つの国に分かれて住む（より正確にい
えば、伝統的な居住地域に国境線が引かれ、
3 つの国家領域に分かれた）カチン（ジンポ
ー、シンポー）族は言語・文化を共通にして
おり、中国とミャンマーの間では交流が盛ん
であるが、インドとミャンマーおよび中国の
間ではあまり交流がない（ただしカチン族の
最大の祭典であるマナオ祭には、インドのシ
ンポー族の人々はミャンマーや中国からも
招待している）。ミャンマーではカチン独立
軍はミャンマー国軍と内戦状態にあり、それ
に対する思いも、中国居住のジンポー族には
強いが、インド居住のシンポー族には弱い。
2. 宗教は 3 つの国で異なる。中国ではアニ
ミズム、ミャンマーではキリスト教（主には
バプテスト）、インドでは仏教である。ミヤ
ンマー、インドでのキリスト教、仏教は英領
植民地期の初期に普及したが、中国のアニ
ミズムは、宗教を禁止した革命後に明確化し
たものと思われる。

3. カチン族の最大の勢力は、ミャンマーに
いる。ミャンマーではカチン族は従来、高地
に住み、主に焼畑移動耕作に従事していた。
また近年には、ヒスイなど貴金属・宝石鉱山
でのビジネスや賃金労働も重要な生計手段
である。調査によると、焼畑耕作は縮小傾向
にあり、賃金労働への依存度が高まっている。
そういう中で、バナナや天然ゴム等の大規模
農園が広がっており、地元住民が土地を失う
という深刻な事態も進行中である。

4. 「陸の孤島」状態にあるプータオでは、
自然資源が豊かである一方、近年の気候変動
の影響を受けて、家畜の水牛や牛が 4~5 月

の暑期に大量に病死するという問題が発生
しており、そのために耕作ができず、米価が
高騰して食料危機が数年毎に発生するとい
った深刻な事態もある。

5. ミッチーナ近郊（市中心部から 15-20km）
の調査村 A の全世帯 123 戸の調査の結果概要
は次の通りである。民族構成：カチン族 91%、
ビルマ族 6%、シャン族 2% など。主な生計
手段は自営農業、畜産（主に豚と鶏）、賃金
労働。農業は、水稲作、飼料用メイズ作と一
部天然ゴムなど。賃金率は 1 日 4000~5000
チャットで、ビルマ・プロパーより相当に高
い水準にある。土地なし世帯は 21%。村の外
への出稼ぎ労働は全労働力人口の 17%、2005
年以降経済は上向きで、15 の村内雑貨店のう
ち 12 店舗は 2005 年以降の設立。オートバイ
の普及も同じ頃から加速。2015 年の電化以降、
テレビや DVD の普及も急進した。

6. 中国のシンポー族のうち、低地部に居住
する人々の主な生計手段は自営農業で、特に
サトウキビやキノコの生産・販売に依存して
いる。かなりしっかりした広い家に居住して
いる。

7. インドのシンポー族は、英領植民地期の
初期に移入して仏教徒になり、かつ平地農耕
民となったという点で特筆される。アルナー
チャル・プラデーシュ州では、彼らはかなり
大きな土地を所有し、主に水稲（天水田）と
茶を栽培している。未耕地（林地）の茶園化
の動きは 1990 年代になってやっと始まった。
それまで、商業的農業にはあまり関わってい
なかったらしい。茶園では、英領植民地期に
現在のジャールカンド州から移住してきた
部族民の末裔らを労働者として雇っている。
アルナーチャル・プラデーシュ州では、もと
も現地に住む少数民族以外が土地を保有
したり、自由に投資をして起業したりするこ
とが法的に制限されており、それが少数民族
の社会経済ステータスの低下を阻止するよ
う働いてきたと思われる。ただし、土地そ
他資源を確保し続けることができた一方、資
金が決定的に不足しており、また高等教育を
受けてもそれに見合った就職先がないなど、
茶園や水田を所有する地主であるにもかかわらず、
シンポー族の経済状態は必ずしもよい
わけではない。とりわけ、将来の発展展望が
見えない点が大きなストレスとなっている。

以上、総括すると、カチン族研究は従来、
ミャンマーと中国雲南省に偏って行われて
きた。カチン族は、山岳高地に住み、焼畑移
動耕作に生計を依存し、キリスト教徒（主
にバプテスト）であり、それは平地農村に住
んで水田耕作を行い、仏教徒である、たと
えばタイ系のシャン族などとの対比で語ら
れることが多かった。

しかし今回、インドに住む同じシンポー族
の調査からは、彼らは歴史のかなり早い時
期に平地農村に住み、水田耕作を行い、仏
教徒となったことが判明した。これはある
意味、衝撃的な事実発見である。なぜなら、
インド

のシンポー族は早い段階でゾミアではなく
なったことを意味するからである。

インドのシンポー族研究からすれば、こ
ういう事実は当たり前であったかも知れない。
しかし、ミャンマーや中国でのカチン（ジ
ンポー）族研究の立場からすると、これまでの
常識を大きく覆す事実にもなり得る。本予備
的研究のねらいはまさにそういう点にあり、
それは別々に行われてきた研究を通地的
に行うことによってはじめて可能になる。今
後は逆に、インドのシンポー族研究者がミ
ャンマーや中国を訪問して調査研究をすれば、
別の方向のインパクトが得られる可能性が
ある。本研究はこうした意味で、別の地域の
地域研究者が共同研究をすれば、互いに従来
の研究常識を大きく覆し、新たな突破口を得
る可能性があることを示したわけであり、
1) のゾミア研究ネットワーク構築と合わせ、
挑戦的萌芽研究として十分な成果を上げた
といえよう。

ちなみに、本研究の終了後、インド - ミ
ャンマー - 中国を結ぶゾミアの通地的研究
を行う新たな予備的研究プロジェクトを開
始し、近い将来の本格的な研究プロジェクトの
立ち上げに備えているところである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

Koichi Fujita, “Transformations of Kachin
Village: Mid-term Report of Household Survey
in a Study Village near Myitkyina, Myanmar,” at
the 17th Zomia seminar held at Yamagata city on
October 22, 2016.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
個人ホームページ(下記)を開設し、そこに
挑戦的萌芽研究のページも掲載した。
<https://kfujita.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤田 幸一 (FUJITA, Koichi)
京都大学東南アジア地域研究研究所・教授
研究者番号：80272441

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

(4)研究協力者

今村真央 (IMAMURA Masao)
山形大学人文学部・准教授